

Computex 台北 2026
調査報告書
(サンプル)

2026 年 6 月 23 日
OSS BroadNet Inc.

目次

1. 全体傾向	4
2. Computex 展示会場	8
2.1 AAEON	8
2.1.1 企業概要	8
2.1.2 展示内容・考察	8
2.2 Acer	10
2.2.1 企業概要	10
2.2.2 展示内容・考察	10
2.3 ADLink	12
2.3.1 企業概要	12
2.3.2 展示内容・考察	12
2.4 Advantech	14
2.4.1 企業概要	14
2.4.2 展示内容・考察	14
2.5 ASUS	17
2.5.1 企業概要	17
2.5.2 展示内容・考察	17
2.6 BENQ	20
2.6.1 企業概要	20
2.6.2 展示内容・考察	20
2.7 E Ink	22
2.7.1 企業概要	22
2.7.2 展示内容・考察	22
2.8 Foxconn（鴻海）	24
2.8.1 企業概要	24
2.8.2 展示内容・考察	24
2.9 GIGABYTE	26
2.9.1 企業概要	26

2.9.2 展示内容・考察	26
2.10 Inventec	28
2.10.1 企業概要	28
2.10.2 展示内容・考察	28
2.11 Lanner	31
2.11.1 企業概要	31
2.11.2 展示内容・考察	31
2.12 Mediatek	33
2.12.1 企業概要	33
2.12.2 展示内容・考察	33
2.13 MiTAC.....	35
2.13.1 企業概要	35
2.13.2 展示内容・考察	35
3. その他	37
3.1 台北公共交通機関への試乗	37
3.2 台北市景（オプションアクティビティ）	38

購入者の属する組織内での報告以外の目的での本書の複製・配布・流用・加工を禁じます。
表現の簡便の為、本書中に登場する各企業様の社名への敬称は、全て省略しております。
同様の理由から、各社の登録商標・商標への®または TM マークの付記は、全て省略しております。

1. 全体傾向

2026 年 6 月 2 日～5 日、TAITRA と TCA の共催の下、台湾・台北市内の TaiNEX と TWTC/TICC で Computex 台北 2026（以下 Computex）が開催された。

開催元の公式情報によると、2026 年の出展社数は約 1,500 社（33 カ国）、展示ブース約 6,000、参加者数 111,312 名（152 カ国）、スタートアップ 500 社（23 カ国）と、世界最大の半導体関連展示会という立ち位置に相応しい規模のイベントであった。

展示会場は、台北南港展覽館 1・2 館（TaiNEX1/2）、台北世界貿易センター第 1 展示ホール（TWTC Hall 1）と、計 3 つの建物に分散配置されていた。

Computex は元来、PC 産業の見本市として出発したイベントであり、PC、マザーボード、グラフィックスカード、各種周辺機器の最新製品を把握し、次に普及する筈の製品・技術を予測するための知見の収集、或いは、最新機器・部品等の目利き買付商談が主たる目的であった。しかしながら今年の Computex は、PC 産業というよりも、半導体が AI インフラに与えるインパクトという壮大な視点に切り口が変わって来ている印象を受けた。

従来は抽象的過ぎて Computex では嫌忌されていた AI データセンター、Agentic AI、Physical AI、AI PC、エッジ AI、低消費電力コンピューティング、高速インターコネクト、次世代半導体アーキテクチャなどの大上段なテーマが各講演者の発表内容に飛び交っており、各社の展示テーマもこれに即したストーリーとなっている印象であり、時代の変遷を強く感じさせた。

具体的な展示内容としては、AI チップやサーバーに加え、AI データセンター、AI サーバー、AI PC、AI 推論半導体、高電圧直流給電（HVDC）、バックアップ電池モジュール（BBU）、液冷システム、シリコンフォトリクス（CPO）、ロボティクス、スマートコックピット、ドローン、5G プライベートネットワーク、6G 通信、低軌道衛星、サイバーセキュリティ、エネルギー貯蔵、ネットゼロ技術等の多岐に及んでいた。

主会場である TaiNEX の最寄り駅は、MRT 板南線の南港展覽館駅、TWTC は MRT 淡水信義線の世界貿易センター/101 駅で、TaiNEX は改札口からエスカレーターで上がると会場ビルに直結、TWTC は上って歩 1 分弱でビル入口であった。

日中時間帯の台北市中心部の車道は渋滞が慢性化しており、ハイヤーや Uber/タクシー、マイクロバス等では時間が読めない一方で、何れの路線も数分から最大 10 分程度の間隔で安定的に運行できている MRT での移動は、会場までの移動の利便性とスケジュールの計画性の双方の意味で、比較的ストレスの少ない移動手段であったように思う。

主会場の TaiNEX1/2 はそれぞれ 1F、3F、4F が展示フロアであり、テーマ毎に区画が分けられており、天井の区画番号を見れば凡その位置が分かる工夫がなされていた。

一方で TWTC の展示フロアは 1F の Hall 1 のみであり、天井の区画番号は TaiNEX と同様であったが、箱が小さく見通しが良好で、どこに行っても人がひしめき合う TaiNEX 程には通行人からぶつかられる事もなく、比較的快適にブース内を観て廻れたように思う。



TWTC の 1F 展示フロア

今年の印象は、或る意味で NVIDIA の展示会とでもいうべき同社の圧倒的な存在感であり、殆どの大手企業が自社ブース内に何らかの NVIDIA 応用製品を展示していた。NVIDIA 自身としては、TaiNEX1 の 1F 入口スペースに実体展示されていた「AI Factory MGX Ecosystem」が目立っていた。



「AI Factory MGX Ecosystem」は、次世代の AI データセンター構築を加速させるためのモジュール型プラットフォームであり、オープンな共通アーキテクチャを採用し、800V DC（直流）配電や液冷技術を取り入れることで、高密度化する AI インフラの電力効率とスケーラビリティを劇的に向上させている。同エコシステムには、ハードウェア分野では電源・半導体・ラック&サブラック筐体・PCB 当各種部品の様々な大手メーカーが参画、ソフトウェア分野では次世代の AI データセンター（AI Factory）を設計・シミュレート・運用・最適化する包括的な古スタックフレームワークである DSX プラットフォームを主軸に各社が応用機能を提供している。DSX では従来のサーバー管理ソフトとは異なり、半導体やネットワークだけでなく、データセンターの「電力グリッド」や「液冷設備」までを一つの巨大なコンピューターとして統合制御し、最少の電力コストで最大の AI 処理能力（トークン生成）を引き出すことを目的に開発されている。

NVIDIA パートナー各社のブースでは、NVIDIA が今年 1 月の CES で発表した AI Factory 向けの新 CPU+GPU となる Vera Rubin の 6 月からのフル生産開始発表を受け、NVIDIA の NVL72 リファレンスデザインに沿って設計・製造された実筐体が一様に展示されていた。NVL72 は 72 個の Rubin GPU と 36 個の Vera CPU を最新の NVLink 技術でラック内或いはラック間で高速接続し、高密度集積に伴う大量の発熱を水冷式冷却機構により高効率に廃熱する革新的な機構設計により、ラック全体を 1 台の AI スーパーコンピューターのように扱う設計である。NVL72 では従来データセンターで主流であったブレード PC を並べる所謂 Intel 的な方式に比べ、10 倍以上の消費電力当たり性能を達成出来るとの事で、今年の Computex の最優秀 Award を受賞していた。

パートナー各社のブースでは、開催初日に各展示会場を廻ったらしい NVIDIA CEO の Jensen Huang が、同社の技術由来の展示内容に書き残した直筆サインが多数目に付いた。各社の展示内容も、我が社は NVIDIA の最新技術・製品に遅滞なく対応出来ています的な切り口が多く、逆に云うとどこも似たような展示内容という印象を受けた。特に多かったのが水冷式ラックで、各社共に中核技術が同じ中で自社独自の差別化要素を出すのに苦戦している様子が伺え、Jensen Huang への皮肉や恨み節を呟く説明員も散見された。全体的な展示傾向としては、大手企業の多くがデータセンター向け AI とエッジ AI の二つの切り口に故意に寄せている印象を受けた。但し見せ方は従来の Computex とは異なり、具体的な産業分野への応用例をストーリー付けたコンセプト展示が多く、とりわけ医療分野への AI 応用と、物流倉庫・工場等へのデジタルツイン応用の展示が多かった。一方で、中小企業各社の一コマブースが集まる区画では、従来通りのバイヤー向けの製品見本市的な展示が変わらず多数見られ、一種の郷愁と安心感を抱かせる雰囲気であった。

スタートアップと各国パビリオンが集められた InnoVEX は TaiNEX2 の 4F に設けられており、今年の参加企業数である 500 社は、昨年比で 11%の増加との事。各国パビリオンの参加国は、スイス、フランス、韓国、タイ、オーストラリア、日本、カナダ、イスラエル、イタリアの 9 カ国で、他にもスタートアップ向け支援・育成エコシステムとして NVIDIA Inception Program、Garage+（台北市内のインキュベーションセンター）、StarFab（台湾の政府系機関・工業技術研究院(ITRI)によるスタートアップ支援）などinkがそれぞれの共同展示スペースを構えていた。

全体の盛況に伴う形で、Japan パビリオンも活況を呈しており、今年の出展社数は 10 社であった。日中間の政治的な軋轢による危機意識の増大がむしろ後押しとなったのか、日台間の活発な経済交流の現状を印象付けられる立寄者数の多さであった。

3. その他

3.1 台北公共交通機関への試乗

台湾高速鉄道（以下「台湾高鐵」）は、台北市（南港駅・台北駅）と高雄市（左営駅）の間の約 345km を最速約 1 時間 30 分で結ぶ高速鉄道であり、台湾の南北を移動する大動脈として、2007 年 1 月の開業以来、経済や観光に欠かせないインフラとなっている。台湾高鐵は日本の東海道・山陽新幹線の車両技術（700 系ベースの 700T 型）を海外で初めて導入した新幹線方式であり、最高速度 300km/h で運行されている。

台湾高鐵の運賃は、台北駅から左営（高雄）駅まで片道指定席で 1,490 元（約 7,200 円）である。同一区間を在来線（台湾鉄道）の特急列車「自強号」などで移動すれば約半額の 843 元で済むものの、所要時間が 3 時間半から 4 時間以上かかるため、ビジネス客や時間を節約したい観光客だけでなく、週末の帰省など地元住民にも広く定着している。運行時間は始発が朝 6 時頃、最終が夜 23 時台で、ピーク時には数分間隔で頻繁に運行されている。

台北捷運（以下「台北 MRT」）は、台北捷運会社が運営する都市型大量輸送システム（地下鉄・高架鉄道）であり、1996 年の開業から 30 年が経過した現在、複数の路線網が網の目のように広がり、その総延長は 130km を超えている。台北 MRT の運賃は、乗車距離に応じて決まる「距離制」を採用しており、初乗りは 5km まで 20 元（約 100 円）で、その後距離に応じて 5 元ずつ加算され、最高で 65 元（約 320 円）に設定されている。

本視察ツアーでは、台北市内および近郊都市（新竹）への移動手段として、台北 MRT と台湾高鐵を積極的に活用し、台湾における公共交通インフラの利便性を実体験した。展示会会場である「南港展覽館」へは、宿泊した忠孝復興駅周辺のホテルから台北 MRT の板南線を利用して乗り換えなしで直行した。乗車チケットや決済には、プラスチック製のコイン型チケットである「トークン」と QR コードの印刷出力を適宜使い分けた。

台北 MRT、台湾高鐵のいずれも電光掲示板の案内や到着予想時刻が正確で、車内の電光掲示板に日本語も表示されるなど、特に日本人には快適さを実感し易い便利さであった。



3.2 台北市景（オプションアクティビティ）

本ツアーではオプションアクティビティとして、若者が屯する台湾版原宿竹下通りとでもいうべき「西門」エリア及び周辺の夜市散策を企画した。

西門エリアへは、宿泊した忠孝復興駅周辺のホテルから台北 MRT の板南線を利用して乗り換えなしで直行した。

西門エリアに関する情報は各種の観光情報誌やネットに豊富なので、ここでは通り一遍の解説は割愛するが、高級中華料理もあるが、B 級グルメとして知る人ぞ知る老舗「阿宗麵線」や近隣の夜市の食べ歩きなど、来年以降も参加者各位にはコスバの良い台湾を今後も是非楽しんで頂ければ幸いである。

